

# 図書館forum

目次

- 変容する附属図書館…………… 1
- 医学図書館について…………… 4
- 《学生に勧めるこの一冊》
  - セミオ・リテラシーのすすめ …… 5
  - 1日10分、乱読のすすめ …… 6
  - 私を動かした本 …… 8
- 写真で見る総合図書館 …… 10
- 吾輩の医学図書館潜入レポート …… 16



## 変容する附属図書館

中根 貞幸

### *The Changing University Library*

福井大学と福井医科大学が昨年10月に統合して新たに「福井大学」となったのを機に、両附属図書館も統合して、文京キャンパスの総合図書館と松岡キャンパスの医学図書館からなる附属図書館として新生した。蔵書は58万冊ほどとなった。

つい蔵書数に触れてしまうのだが、長い間、それが図書館の規模と質を示す指標とされてきたからである。ところが近年、大学図書館では、電子図書館的機能の充実度も評価の尺度となってきた。デジタル時代における大学の教育研究の行く先を思えば、避けがたいことである。

附属図書館は総合情報処理センターと並んでIT技術を真っ先に取り入れて、大学の新たな学術情報基盤の構築に寄与してきたことは周知のことである。その最たるものは、電子ジャーナルとウェブベースのデータベースの導入である。導入と言っても、実際にはこれらを提供するサーバーにアクセス出来る環境を整備したということである。

電子ジャーナルというのは、デジタルファイル形式にした学術雑誌のことで、オンラインで供給される。Elsevier (Science Direct), Springer, Blackwellなど大手の出版社から提供されるものと、ProQuestやEBSCOのようにアグリゲータ( aggregator)が種々の学術雑誌を集めて、それをパッケージとして提供しているものがある。アグリゲータ系は電子ジャーナルの購読料が単体で決められているが、それ以外は、殆どの場合、冊子体の購読雑誌との抱き合わせで電子ジャーナルの購読料が決定される。現在、本学では両館併せて6,000誌ほどの電子ジャーナルが利用できる環境

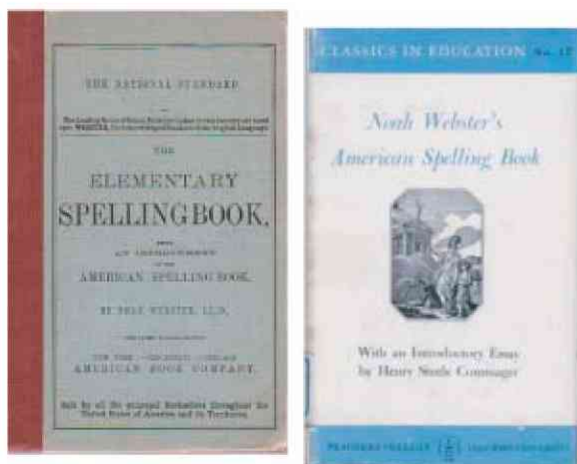
となっている。外国学術雑誌の高騰で、購読の継続が難しくなっている中で、これは非常に有意義なことである。6,000というのは、本学で購読している冊子体の外国学術雑誌数の7.5倍にもなるので、驚異的な数である。電子ジャーナルは、その迅速性、利便性、省スペース性ゆえに、インターネット時代においては必要不可欠の存在となった。電子ジャーナルの他に、CA-on-CD, SwetScan, JDream, PubMed, 医学中央雑誌のような学術データベースにもキャンパス内の端末からはアクセスできるので、是非活用していただきたい。

総合図書館では一般市民にも図書の閲覧のみならず貸出しも行うようになった。より開かれた図書館を標榜する附属図書館の姿勢の一つの表れであるが、大学構成員の利用が優先されることは言うまでもない。書庫の狭隘化のために、複本を取り揃えておくだけの余裕がないからだ。図書館を地域に無料で開放できることは素晴らしいことであるが、プライオリティーは考えねばならない。

学外者への資料の閲覧供与と貸出しだけでは十分な図書館の開放とは言えない。IT時代においては、電子ファイルで広く情報を発信していかなければ、真の意味での図書館開放は実現されない。既に、本館が寄託を受けている小島家文書はデジタル化され、パスワードを取得すれば6,000点ほどの古文書がブラウザで閲覧できるようになっている。本館が所蔵する貴重資料は諸権利に抵触しない限り電子化して、広く世界に公開していくのが大学図書館としての社会的使命であろう。

図書館との関わりで、私は最近このような経験をした。ある本の翻訳をしていた時に、

*The Elementary Spelling Book*と出会った。後にアメリカの英語辞書の代名詞ともなった Noah Webster が著わした綴り方教本で、出版後100年で1億部売れたというベストセラーである。これは *A Grammatical Institute of the English Language* (1783) という三部作の第一部であり、*The American Spelling Book* という表題で出版されていた教本の改訂版である。これ自体は多くの大学図書館に所蔵されている。私は元の初版を見たかったので、所蔵を NACSIS Webcat で検索してみると、*Noah Webster's American Spelling Book* (1958) しかヒットしなかった。日本の大学図書館では7館しかこの本を所蔵していないが、本館はその内の1つに入っていた。総合図書館の OPAC で配架場所を調べると、所在はすぐに見つかった。古い本だが、遡及入力も済んでいたからである。“Classics in Education” という叢書に入っているからか、3門の教育に分類されていた。この本に関心を抱く多くの人には8門に配架されることを期待する。このような場合、ただ語学関係の書棚を見て回るだけでは見つからない。本の所在を調べる時には OPAC の威力は凄い。とは言え、きちんと整理されて書架に立ち並ぶ本の群れを物色するには別の魅力があり、これは捨てがたい。



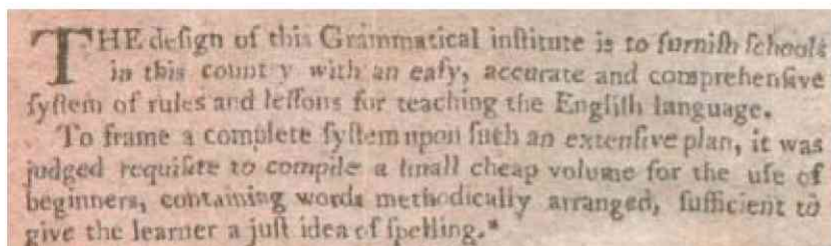
左は“*The Blue-Back Speller*”として親しまれた *The Elementary Spelling Book* の最後の版 (1908)。右は1831年刊の *The American Spelling Book* のファクシミリ版 (1958)。

どのような手段であれ、探している本が見つかること、歓びを禁じ得ない。まるで掘出し物に出会ったような気分で、早く中を覗いてみたい。Webcat の書誌情報では、この本はリプリント版と記されているが、眼前にしてみると、1831年の236版を縮刷したファクシミリ版だと判明した。結局は、手に取って読んでみないとどのようなものかはよく分からないのが本の宿命である。だからこそ、実際に書物を保管している図書館の存在意義があるし、図書館に足を運ぶことにも意味がある。

*The American Spelling Book* の初期の版は日本ではお目にかかれようだが、驚いたことにこの本の1800年頃の版が個人のサイトで公開されていることを知った。検索エンジンを使ったら、瞬時に見つかった。Pat Flieger という研究者が管理するサイト (<http://www.merrycoz.org/>) である。彼女はこの本のすべてをテキストファイルにしてすべて公開すると共に、各ページの画像も用意してリンクを張っているのだから、組版まできちんと確認できる。前書きを読んでみると、1831年版とは全く異なる。

私が感心したのは、彼女が一字一句をすべて自分で書き写していることである。このような古い書物には現代の OCR ソフトといえども対応できていないので、デジタルファイルにするには丹念に写すより仕方がないのだが、その情熱たるや並々ならぬものがある。語学系の古い本には図表が多くて、その作業の大変さを私はよく知っている。彼女自身、*The American Spelling Book* の転写には閉口して、二度とやりたくないと言っている。しかし、彼女は自分が初めて転写し、公開できることに喜びを感じているようである。彼女はそれ以上は言っていないが、転写しながら読めば、じっくりと頭に入るので、知的な楽しみが増すものである。電子的なコピーは簡単にでき





*The American Spelling Book* (c1800)の“Preface”の冒頭部分で、執筆の趣旨が述べてある。最初は読みにくいかも知れないが、読み慣れると違和感がなくなる。

るが、著者の思考を読者が自分の頭の中に簡単にコピーできるわけではない。大切なものは苦勞しなければ手に入らない。

このような学術的価値のあるものがインターネット上のどこにでも置かれているわけではない。インターネットにアクセスする環境が大学があれば、無尽蔵の情報にアクセスできるので、図書館は不要だと思うのは錯覚である。図書館は多大な経費を費やして電子図書館的機能を維持し、有益な情報世界へのポータル(入り口)となっている。それによって、図書館の利用者は簡単に重要な学術情報を得ることができるのである。

個人でもこれだけの情報発信が出来るのであるから、今後、図書館が自館の資料をデジタル化して発信するには、資料を画像にするだけでは十分とは言えない。*The American Spelling Book*にしても、字体が古く、長いfが使われていて、現代の読者には読みにくい。その意味で転写は大きな助けとなるだろう(1831年版ではsに標準化されている)。小島家文書が高い歴史的価値を有しようとも、多くは崩し字で書かれているので、すらすらと読めないばかりか、現代の読者には判じものの連続と映るであろう。もし釈文して現代の文字で表されていれば、参照したいと思う人が増えることは確実である。ただこのような作業は、専門家の協力と館員の粘り強い努力がなければ不可能である。図書館は、大学の中核施設として、個人の努力に負けないように、デジタルアーカイブの構築といった仕事にもチャレンジしていかなければならない。



附属図書館報として、旧福井大学にばかりん」、旧福井医科大学にほはこぶね」があったが、大学の統合と共にこれらも一本化して、新たに「図書館forum」として発行することにした。“forum”の原義は「広場」であるが、日本語の「フォーラム」(「公開討論の場」)という意味で定着している。この館報によって図書館から発信を行うだけでなく、学内から幅広く意見を寄せてもらい、図書館活動を活性化して、図書館が新たな知の「広場」となることを願っている。“forum”とローマ字表記にしたのも原義の響きを残したいからである。本学は今年4月には法人化を迎えるが、それを目前にしてここに新館報を創刊できることは喜ばしいことである。

文人George Mikesは図書館の思い出について綴った一文でこう述べている。“I loved it [the British Museum Library], too, but somehow it was not quite as wonderful as the Library of Budapest University. As with women with libraries: the first encounter has a very special, inimitable flavour.”—Miron Grindea (ed.), *The London Library* (1978), p. 41. 誰しも母校の図書館にほ非常に特別で、他にはない味わいを覚えるものである。蔵書数が多いとか立派な建物だからということだけではない。読書机の手触りや窓外に見える木々、その枝を渡る風、カウンター越しに見る館員の笑顔、厳格さ、優しさなどなど、色々なものが醸成する趣きである。学生諸君の福井大学附属図書館との出会いにも、それぞれ独特の味わいが残ることを祈りたい。

(なかねさだゆき 附属図書館長)

## 医学図書館について

村松 郁延

医学図書館は、旧福井医科大学の附属図書館として昭和55年に開館され、昨年10月の統合により医学図書館に名称が変更になりました。現在、約116,000冊の蔵書と3,756タイトルの学術雑誌を毎年購入しており、学生、教職員だけでなく、外部の人々にも利用されています。最近3年間の統計を見てみますと、1日の延べ入館者数は約400人に上ります。これは単科大学、医学部だけの松岡地区としては決して少なくない数です。研究者による文献検索だけでなく、学生が医師国家試験、看護師国家試験の勉強の場として頻繁に医学図書館を利用していることがわかります。これまでの関係者の努力で、2階の机は勉強しやすいように配置換えされ、24時間開館が8年前より実現したことも大きな要因と思われます。

医学図書館の入り口正面には、日展会員福沢一郎氏寄贈の油彩画の大作「ノアの箱舟」がかかっています。医学部教職員および学生諸君が、生命に真摯に立ち向かうことを願って描いてくださったものと聞いています。医科大学の時はこの志を反映し、初心を忘れることのないよう、図書館報「はこぶね」を発行してきました。「はこぶね」は大学の統合により廃刊になりますが、新しい図書館報になっても、医学部の学生は「はこぶね」と入学時の志を忘れず、自己に磨きをかけるよう勉強に励んでもらいたいと思っています。

医学部では、平成16年度よりチュートリアル教育が本格的に始まります。従来の座学中心でなく、学生の自主的学習が主体となります。しかし、昨年本学で行われた模擬チュートリアルを見る限り、かなりの問題点を感じ

ました。それは、議論があまりに表面的なことに終始し、テーマについて深く掘り下げることができなかつたと感じたからです。チュートリアル教育では、限られた時間内に、いかに深く、また多面的に学習できるかが成功の鍵になります。最初に、どのような情報・知識を入手するかが、その後の展開を規定すると言っても過言ではありません。情報・知識の入手方法は近年大きく様変わりしました。インターネットを用いると、誰でも簡単に情報を得ることができます。しかし、インターネットの情報はまだ不十分であることを認識してください。大学では高度の知識と理解が要求され、世界的な視野で評価がされます。より深い学習には、図書館で文献・教科書などを調べる日常が必要不可欠なのです。医学図書館では、そのために必要な学生図書できるだけ準備したいと思っています。

研究に必要な文献などの検索方法も様変わりしてきました。これまでの紙媒体による方法から、電子データベースや電子ジャーナルを用いた方法に変化してきています。医学図書館は平成13年度より電子ジャーナルを導入しており、各教室から自由にいつでもアクセスできます。平成16年度からは、総合図書館と合同での導入が予定されています。既存の概念、利権にとらわれることなく、新しいスマートな大学そして図書館として機能していくことが要求されます。しかし、図書館には、図書経費の高騰、図書収納施設の狭隘化など、直面する問題が多々あります。皆様のご協力をお願いする次第です。

(むらまつ・いくのぶ 医学図書館長)



## 《 学生に勧めるこの1冊》

# セミオ・リテラシーのすすめ

伊藤 勇



最近読んだ本の中から、石田英敬著『記号の知/メディアの知—日常生活批判のためのレッスン』(東京大学出版会、2003年10月刊)を勧めよう。本書は、著者の石田氏が東京大学の1~2年次生を対象に行なっている教養科目「記号論」の講義をベースにまとめられたもの。丁寧な解説が施され、また、絵画や写真、お馴染みの広告やニュース番組などを題材に、具体的な分析が披露されているので、初学者でも少し気合を入れればそれほど理解に苦しむことはなく、面白く読み進められるはずだ。

本書が扱うのは、ソシュールやパースに始まり、構造主義・ポスト構造主義を経て、20世紀後半の人文・社会科学に広範な影響を及ぼしてきた記号論(記号学)という知の世界である。記号論はもともと言語学から生まれたものだが、今や、人間の文化や社会の営みを理解する上で欠かすことができない知、現代の重要な「教養」の1つとなった。本書は、著者独自の構想の下で、今日のメディア化した世界を題材にした11のレッスンを通して、記号論の魅力や切れ味を教えてくれる。

本書は、モノについてのレッスン(第1章)、記号と意味についてのレッスン(第2、3章)、メディアとコミュニケーションについてのレッスン(第4章)、<ここ>についてのレッス

ン(第5章)、都市についてのレッスン(第6章)、欲望についてのレッスン(第7章)、身体についてのレッスン(第8章)、象徴政治についてのレッスン(第9章)、<いま>についてのレッスン(第10章)、ヴァーチャルについてのレッスン(第11章)、計11章から構成される。最初の3章では、記号論が成立する歴史的根拠や記号論の基本視角が説かれ、記号論とメディア論の接点を確認する第4章を経て、第5章以降の後半では、メディア化・情報化した現代に特徴的・支配的な記号・コミュニケーション活動を題材にした考察や分析が提示されている。

前半はやや難しいので後回しにして、第5章以降で自分が興味をひかれるところから読み始めよう。例えば、現代の経済・消費生活に顕著な記号活動である広告を取り上げ、モノに対するわれわれの欲望が広告の意味作用によっていかに誘発されているかを読み解く第7章、君が代・日の丸問題やサッカーのワールド・カップを題材に国民国家による象徴政治を考察した第9章、ニュース番組の分析を通して、世界の<いま>を作り出すテレビ記号の働きを考察した第10章など、どの章も具体的で示唆に富む。A5版横組みで392頁、けっこう分量があり、見慣れぬ用語や概念も登場するので少し手ごわいところもあるが、是非全体を通読することをお勧めする。

本書全体を通じて著者が明らかにしてくれるのは、「意味する動物」である人間にとって不可欠な意味環境が、今や、様々なメディアを媒介にした記号の働きによって強力かつ一元的に組織されており、それがわれわれの

日常生活の「自明で自然な」前提となっているということである。その上で著者は、であればこそ、そうしたメディアや記号の働きを理解し、意味環境の自明性・自然性を疑い、相対化し、自らの日常生活を問い直す力——これを著者は「セミオ・リテラシー(意味批判力)」と呼ぶ——が、現代人の「教養」と

して、われわれ一人一人にとってきわめて重要になっているのだと言う。この主張にはまったく同感である。本書によって、学生諸君が「意味批判力」の獲得にいざなわれることを期待したい。

(いとう・いさむ 附属図書館運営委員)

## 1日10分、乱読のすすめ

松木 孝澄

読書は自分の知らない人生を経験させてくれる最良の友である。一日十分間でも十五分間でもよい、毎日欠かさず自分の心の糧となる本を読むことを習慣として続けてほしい。

小説を含めた文学作品には、私たちが日頃接することのできない、多様な考え方や生活習慣をもった人々が登場し、それぞれの生きざまを見せてくれる。そして、人は一人で生きているわけではなく、多様な人々と関わりながら生きていることを教えてくれる。生後二十年程の比較的固定された人の環境での経験は、多様な価値観や宗教観をもつ人々で構成される国際社会をもちだすまでもなく、福井市内や松岡町内ですらパニックを起こしそうになった新生入生当時の自分を思い出せば、いかに乏しい経験と学習であったかを想像できるだろう。

ところで、自分が読みたいと思える本を探すことは結構骨のおれる作業である。そんな作業を少しでも軽くしてくれる本として、出版当時からベストセラーにあるいは話題になった日本の名著を、著者の視点でまとめた「あらすじで読む日本の名著」小川義男著、楽書館(中経出版、2003年、1050円)が、中学・高校でも話題になっている。漫画と違って中高校生には取っ付きにくい、

現世代より前の時代に書かれた文学作品を原著で読む生徒が格段に増えたという。

この一文も同様に何かの役に立てば幸いである。もとより、限られた字数で多様なニーズに応えることはできないから、眼にとまった書棚の本に注釈をつけて参考に使いたい。

「痴呆になってしまえば、本人は何も分からないのだから、かえって幸せかもしれない。周囲は困るだろうけど」などという人たちが専門家といわれる人の中にさえ、そして介護の現場にいるひとの中にさえいるのが現状である。そこで、「私は誰になっていくの?」Christine Boden著、桧垣陽子訳、クリエイツかもがわ(かもがわ出版、2003年、2100円)。40歳代半ばまでオーストラリア政府内閣省の高級官僚を務めた経歴のアルツハイマー型痴呆症の病者が、本人の立場から感情的、身体的、精神的な世界の旅を書き記した唯一の書である。





「痴呆を生きるということ」小澤 勲著，岩波新書(2003年，777円)や「バリ デーション」ナオミ・フェイル著，藤澤嘉勝訳，筒井書房(2001年，2625円)が長年痴呆者の診療に携わった精神科医や長年介護に携わった看護師の視点から書かれないずれも高い評価を受けた良書とは異なり，病者の視点から語られていることが新鮮な驚きとこの疾患に対する貴重な発見を我々にもたらしてくれる。



「遺伝子でできること，きまらぬこと」中込弥男著，裳華房(1999年，1575円)。ヒトの遺伝についての啓蒙書を多数執筆している著者の代表作の一つ。あなたの遺伝についての疑問に答えます。人類遺伝学入門書としても最適。「パッチ・アダムス いま，みんなに伝えたいこと」パッチ・アダムス，高柳和江著，主婦の友社(2002年，1470円)。ロビン・ウィリアムス主演映画『パッチ・アダムス』のモデルとなった本人との共著。そのまま福井大学には当てはまらないとしても，こんな風な人生もあるのかもしれない。



「死にかたがわからない」柳田純一著，集英社文庫476(1997年，500円)。慶応大学教授を務めた法医学者が東京都非常勤監察医の検死メモから，さまざまな人の生きざまを綴ったもの。記述が正確で法医学の入門書としても推薦できる。「死体は語る」上野正彦著，文春文庫(2001年，520円)。30余年の元監察医(元東京都監察医務院院長)による事件簿。人生の表と裏をかいま見せる60万部のベストセラー作品。

「死生学がわかる」アエラムック，朝日新聞社(2000年，1260円)。2000年前半までのこの主題に関して入門的にまとめた小冊子。この後も，日野原重明著「生きかた上手」ユーリー ーグ(2001年，1260円)など多数の本が書店を賑わせている。



(まつき・たかすみ 附属図書館運営委員)





## 私を動かした本

梅田博之

強い印象を受けた書物をあげよと言われれば、たいてい、若いときに読んだ本を上げるであろう。私にとっても二十代前半に読んだ遠山啓著の「無限と連続」と吉田洋一著の「零の発見」がある。この書物は無限とはどう考えるか、連続性は数学ではどのように扱うか、ということをも簡明に述べてあり、一言で言えば、数学は公式を覚え、答えを出す学問ではなく、考える学問であるということを知らされた最初の本であった。しかしこの本は数年間私の手元にあったが、その後とうとうとして行方がわからず、時々その所在が気になっていた。

### 三十年後の本との再会

大学内において、われわれの研究室のある棟は改修工事が始まり、平成14年の6月頃から平成15年2月頃まで、何箇所かに分かれて他の場所に居候する事になった。実験装置や器具類は専門業者が適宜に荷造りを行ってくれるが、本や研究資料、雑誌などは自分でダンボール詰めを行わなければならなかった。指定の引越しの日が迫ってくるが、授業、会議等で一向に進まず結局本の分類どころか、中身に目を通す暇もなく引越し日 came。古いダンボールに入っている本や資料はそのまま荷物として、ロッカーやファイルキャビネットをダンボールに移す作業は夜半まで続いた。このような状況は、引越し先で大きなトラブルを引き起こす原因となった。たとえば、必要とする研究データや調査のための専門書を見つけ出すのに、時間がかかり過ぎること、学生の要求する本類が即時に提供できないことなど、われわれ教員にとって専門図書から

引き離されたら、何の力もないいかに弱い存在になるかしみじみと実感させられた。

さて、悪戦苦闘した8ヶ月間の引越し先から元の居場所に戻る事になったが、教官室は2/3に縮小されていた。当然、今までの書籍、資料が入れる訳がなく、整理し、捨てる事になった。30年近く整理しなかった本を取り出す作業が始まった。その中に古い封筒に丁寧に封印してある書物が見つかった。それは岩波新書24冊であり、長らく探していた「無限と連続」「零の発見」も含まれていた。その本を手にし、懐かしい気持ちと、夢中で読んだ昔の自分自身を思い出す瞬間でもあった。遠山啓著「無限と連続」の目次は第一章無限を数える、第二章「もの」と「はたらき」第三章 つくられた空間、第四章 始めに群ありき、からなっている。著者は次のように述べている。“植物が成長するとき、幹や枝や葉がますます複雑に分化して行く上へ上への発展と相並んで、根がますます地中に入っていく下へ下への発展があるはずである。下への発展においては複雑化よりはむしろ単純化の方が主導的になってくる。筆者は主としてこの方向への発展とらえて、そこに使われている論理をできるだけ平易に、高速写真をゆっくり映すような方式で読者の前に繰り広げようと思った。”さらにこうも書いている。“音符が読めなくとも、感受性さえあれば、優れた音楽の鑑賞家になれるはずであるから、たとえ、作曲家や演奏家になれないとしても、数学を「鑑賞する」ことはできる。”この言葉は20代前半の私にとって勇気100倍、数学の勉強のきっかけをつくってくれた。

吉田洋一著「零の発見」の改訂版は、数学の生い立ちについて書いてあり、連続性の問

題を「直線をきる」ことから説き起こしている。特に超越数としての円周率  $\pi$  を題材に無限小数と無限級数の関係を、歴史的逸話をふまえて、いかに先人が「数」を作り出したか、簡明な文章で書いている。注目にあたいするのは、円積問題(円の面積と等しい面積を有する正方形の作図問題)をとり上げ連続性や、群について書いている。円の面積が  $\pi$  のとき正方形の一边は、円の直径からその  $1/9$  を減じたものを正方形として与える。これは円率  $\pi$  が近似的に、 $(2-2/9)^2 = 3.1604\dots$  に等しい。この円積問題は連続性の概念へと展開されている。まず、最初に円に内接する正方形から、つぎにこの正方形の各辺を底辺として、円の上に頂点を有する二等辺三角形を描いて、この円に内接する正八角形をつくる。またさらに、この正八角形の各辺について上と同様のことをおこなえば、今度は円に内接する正十六角形が出来上がる。この方法を続けて行えば、えられる内接正多角形の面積はしだいに増大して、円の面積にどこまでも近づく。これは直線の連続、したがって実数全体の連続の概念である。

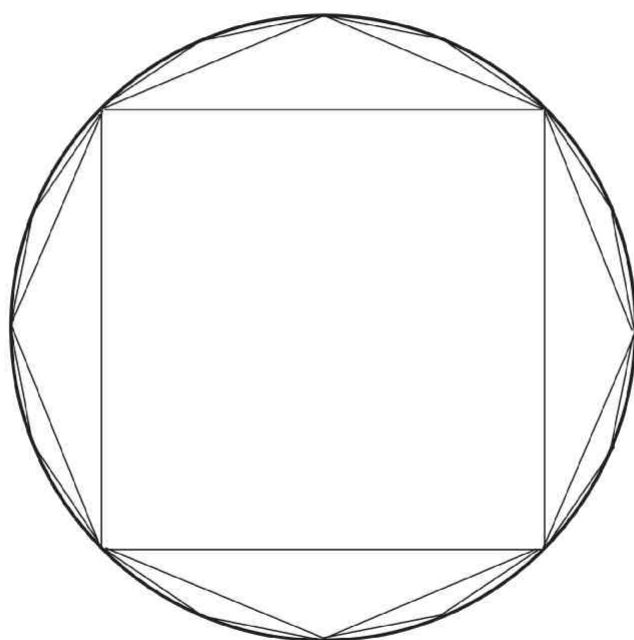
## 入試問題の新聞記事余話

ある新聞に次のような記事が掲載された。

一出題に新潮流:( $\pi$  円周率が3.05より大きいことを証明せよ) 2003年東京大学前期入試の試験問題— この記事には、出題者の談話として「考え方をみたい。試験問題は大学が発する最大のメッセージだ」、大手予備校の談話として「入試問題に新たな流れができ、その一つに思考力重視があげられる」。さらに新聞記事は答えとして“円に内接する正八角形、あるいは正十六角形を考えればよい”とコメントがあったが、翌朝の朝刊で“円に内接する正二十四角形を考える”が正しいと訂正した。

さて、考え方をみたい、とすることから、“円に内接する正八角形、あるいは正十六角形”を書いて考えることを一つの答えとした受験生には、点数が与えられたのだろうか? ふと余計なことが頭を横切った。

(うめだ・ひろゆき 附属図書館運営委員)





# 写真で見る 総合図書館

大学の正門からメインストリートに沿って100mほど進むと13階建ての校舎があり、左手方向に見える大きな樹木に囲まれた3階建ての建物が総合図書館です。



図書館の入口前には、総合図書館のシンボルでもある「花梨（かりん）」の木があります。秋にはいくつもの大きな実がなります。直接食することはできませんが、喘息等に効くといわれる花梨酒の材料です。



**図書館では、学習に必要な資料が開架されているのはもちろんですが、学習を援助するためのいろいろなサービスを行っています。それでは早速総合図書館をご紹介します。**



図書館の入口には返却ポストがあって、閉館後や日曜日などの休館中でも借りた図書を返却することができます。



入り口を入るとゲートがあります。ゲートは二つありますが、左側から入ってください。(右側は出口専用です。)

出口では、貸出手続きを忘れた場合ブザーがなりますのでご注意ください。

【ホール】

ここには、パソコンやビデオが並んでいます。パソコンはインターネットに接続されていて、ネットサーフィンや蔵書検索、電子メール等いつでも自由に利用できます。



ビデオは、1階の視聴覚資料室や2階のマルチメディアコーナーで視聴することもできます。

資料をコピーしたい場合は、コイン式の複写機があります。ただし、著作権法を守って利用してください。



【カウンター】

利用者の皆さんとの窓口です。資料の貸出はもちろん、図書館の利用方法、本学に所蔵していない資料の複写依頼などなんでもご相談ください。

図書館で借りられる資料の冊数と貸出期間は、以下のとおりです。返却期限を過ぎると貸出停止というペナルティ(罰則)が与えられますから注意してください。

資料	期間		冊数
	通常	休暇(作業)期間	
図書	2週間	休暇開始1週間前～ 終了1週間後	10冊以内
視聴覚資料	1週間		5点以内 (6点以上がセットの場合は5点と見なす。)
教科書	3日間		3冊以内
教養雑誌	1週間		3冊以内





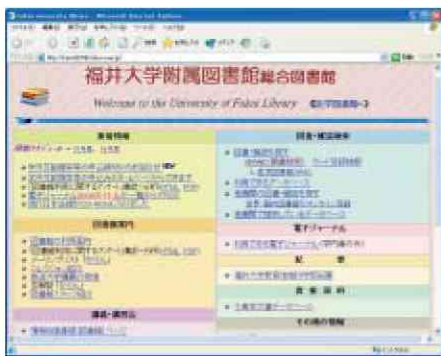
【自動貸出返却装置】

平成15年度に導入された自動貸出返却装置では、画面に表示されるメッセージにしたがって操作することで、図書の貸出や返却ができます。

ただし、視聴覚資料や教養雑誌などはカウンターで手続きをしてください。

【視聴覚室】

廊下の奥にあり、大型テレビやビデオレコーダが設置されています。ここでは海外の衛星放送なども視聴できます。



図書館のホームページでは、利用案内、蔵書や各種の文献データベースの検索、電子ジャーナルの閲覧、有用な Web ページへのリンク等や情報への窓口ともなっています。



【郷土資料室】

福井県に関する資料を配架しています。県内の市町村史等もここに保管されています。

このエレベータで2階や3階の閲覧室にいけますが、健康と節電のためなるべく階段を利用しましょう。



2階には、国勢調査報告書や各種統計書、新聞の縮刷版等が配架されています。



2階のロビーには、大型テレビが設置されています。海外の衛星放送を視聴できます。また、英語や中国語の新聞もここに配架されています。

#### 【マルチメディアコーナー】



ここでは、海外衛星放送やビデオ、CD等の視聴ができる個人ブースがあるほか、インターネットに接続されたパソコンも自由に利用できます。

#### 【雑誌コーナー】

最新の学術雑誌や教養雑誌を配架しています。借りることができる雑誌には「借りられます」シールが貼ってあります。



国勢調査報告統計書等が配架されているコーナーには、小・中学校の教科書も配架されています。きっと皆さんが使った教科書もありますので、ぜひ一度探してみてください。



【 特殊資料室】

永平寺の開祖である道元禅師に関する資料を集めた道元文庫や小島家文書などのコレクション, お雇い外国人として来福したグリフィスの関係資料, 与謝野晶子と同時代に活躍した歌人山川登美子の関係資料, 幕末の歌人橘曙覧の短冊, 福井藩主松平慶永(春岳)の掛軸など貴重な資料を配架しています。



昭和12年に発行された「橘曙覧翁七十年祭記念繪葉書」などもあります。



3階への階段を登ると, 踊り場に奥越の山々をかいて望む白山連峰の写真があります。



ロビーには, その日の新聞(朝日, 読売等主要全国紙, 福井新聞, 県民福井等)を配架しています。



【 参考図書室】

ここには, 百科事典や英語やドイツ語等の言語辞典, 各分野の専門事典やハンドブックなどを配架しています。この資料は, 館内で利用するだけで借りることはできません。





### 【 閲覧室】

学習に必要な図書が配架されています。内容の主題ごと(日本十進分類法 NDC)に配架しています。また、この部屋には蔵書検索用のパソコンもあります。

**図書館にある資料は、ここで紹介した各部屋に配架されているものだけではありません！！**

### 【 書庫】

製本雑誌や古くなって利用頻度が低くなった図書が中心ですが、好日文庫という国語学関係のコレクションや歴史的に貴重な資料も保管されています。



書庫へは、1階カウンター前の入口から入室します。ただし、かばん等の持ち込みは禁止されていますので注意願います。

いかがでしたか？

写真だけではわからないと思います。ぜひ直接図書館へ足を運んでください。お待ちしております。また、実際に図書館を利用して気がついたことや、ご意見ご要望などがありましたら、館内にあるご意見箱に投書していただくか

[service@karin00.flib.fukui-u.ac.jp](mailto:service@karin00.flib.fukui-u.ac.jp)へメールしてください。



# 吾輩の医学図書館潜入レポート

吾輩は医学図書館周りを巡回する猫である。

毎日毎日昼も夜も図書館を利用する人たちの出入りを見ていると、吾輩もちょっくら覗いてみたくなったので、先日図書館員の目を盗んで潜入したんだにゃ。以下は吾輩の突撃レポートにゃり。是非目を通して見てくれにゃり。



- ① 玄関を入ると右手にカウンター、左手に情報検索コーナー、そして目の前には自動入退館装置。まずは、学生証を入館ゲートに通すだにゃ。図書館利用の第一歩にゃり。

## ※カウンター

図書館職員がいるので、図書や雑誌のありかがわからない、コンピュータがうまく使えない、またまた蛍光灯が消えてるんだけど、ってなことまで、とりあえず何でも言える場所。気軽に話してみるだにゃ。

## ※情報検索コーナー

医学図書館のホームページから、データベースを利用したり、電子ジャーナルをダウンロードしたり、調べものができるんだにゃ。

## ※自動入退館装置

医学図書館は、手続きをすれば夜間の特別利用ができる。そのためにも入退館装置が必要なんだにゃ。

- ② 入館ゲートを通ると正面は雑誌閲覧室。おっとその入口付近にOPAC（オーパック）と呼ばれる医学図書館蔵書検索用パソコンが2台並んでいるのを確認するにゃ。

さて、雑誌閲覧室に入るだにゃ。

## ※OPAC（オーパック） 医学図書館蔵書検索用パソコン

図書名や雑誌名を入力することでその資料が医学図書館にあるのかわかるのか、あるんだとしたらどこにあるのかわかる。

画面の「目録検索」を実行して、キーワードに何か入力してみるだにゃ。「一覧表示」をして、雑誌の所蔵が

図書館 1998-2003 / 21-25, 26(1-5)+

になっていれば、この発行年のこの巻号の雑誌がある、ってことにゃり。

- ③ 雑誌閲覧室に入ると右手に閲覧席，左手に電動書架がずらり。さ，目指す雑誌を探してそろりそろり・・・



#### ※雑誌

入口側の書架には，和雑誌（日本語で書かれた雑誌）が五十音順に，奥の書架には，洋雑誌がアルファベット順に並んでいる。

電動書架の1列目から正面の書架は，今年発行された新しい雑誌にやりよ。さらに今週受入れた最新の雑誌は正面のブックトラックに並んでいるから要チェック！

<ここで注目！>

この1階にあるのは1987年以降に発行されたもの。それ以前のは2階。ない～！！って叫ぶ前に発行年を確認してみることにゃ。

- ④ 目指す論文ゲート！コピーしたいと思ったら・・・

#### ※文献複写

校費による複写は雑誌閲覧室つきあたりの複写機，カラー複写機が使える。

私費による複写は，カウンター隣の複写室でコピーができるんだにゃ。

<ここで注目！>

た・だ・し，著作権法により，図書館でコピーできるものは図書館の蔵書に限ること（ノート類はだめだにゃ！），それから，必ず申込書を書くこと（図書館員がチェックするにゃ！）になっているから，お忘れなく。

以上，図書館1階の潜入レポートだったにゃり。次はいよいよ禁断の2階へ・・・って違うか。赤じゅうたんの階段，爪でひっかかないように気をつけないとにゃー。



- ⑤ はい，こちら2階にゃり。

階段を上がるとすぐ右手が図書閲覧室入口。左手が参考図書室，目の前のブラウジング・コーナーでは皆さん気分転換ってとこかにゃあ。

#### ※ブラウジング・コーナー

教養雑誌，新聞，教養図書が置かれているんだにゃ。学問も大切だけど，今，世界で何が起きているのかも知ってないとにゃー。井の中の猫ってか。あ，こりゃまた吾輩としては低レベルなしゃれときたもんだ。情報検索用パソコンもあるにゃ。



## ⑥ まず図書閲覧室へと。

さっき、OPACで図書を所在表示してみると、「2F 図書閲覧室」って出たのがここにゃ。いや～なんだか図書がぎっしり。探すの大変そうだにゃあ～。

図書閲覧室の中は、手前が一般教育図書、向こう側が医学関連分野図書。本の並び方は、「図書分類」に従って左上から右下並んでいるんだにゃ。「図書分類」は書架にはりつけてあるにゃ。

## ※図書分類

医学関係はQH→WZまでである。例えばQSは人体解剖学、WAは公衆衛生って感じだにゃ。(WY(看護学)、WZ(医学史)は一般教育図書の終わりから並んでいるにゃ)。

OPACで、所在表示2F 図書閲覧室、請求記号WY18.2||1998って出てきたら、この部屋のWY18.2の場所の、1998年発行の場所を探せばいいんだにゃ。簡単だにゃ～。ん？借りたい？じゃ借り方は後から1階で教えるにゃ。

## ⑦ おっとこの手動書架のことを忘れていたにゃ。これが、1986年以前発行の雑誌だにゃ。さっき、1956年発行のNATUREを覗いていたら吾輩の産まれた頃を思い出したにゃりよ。あのときゃ、まだ人類は月にも行っとらんかったんにゃからのう。ん？お前の年はいくつだって？それは秘密にゃりよ。

## ⑧ ここは、参考図書室だにゃ。ここには、視聴覚資料も置かれている。それから、個室視聴覚室、グループ視聴覚室、医学資料室があるんだにゃ。

## ※参考図書室

参考図書とは、調べものをするための道具類のことだにゃ。一般的な辞典・事典類、統計書、など。医学関係の参考図書は図書閲覧室のそれぞれの分類のところにあるんだにゃ。ちなみに、一部国試対策用問題集もあるから使ってみることだにゃ。

## ※視聴覚資料

ビデオ、CD、CD-ROM、DVD、スライドなど。NHK教育で人気シリーズの“ER”のDVDも人気だにゃ。

これで2階のレポートを終わるんだにゃ。音を立てずに歩くのは得意なのだにゃ。



## ⑨ さっき図書閲覧室で見つけた図書を借りるんだったにゃ。

医学図書館では、自動貸出返却装置(通称パルス君)を使って借りるんだにゃ。きちんと手続きをとらないと、お互い困るし、出口で「ピー！！」ってゲートがしまるんだにゃ。

### ※ 自動貸出返却装置

借りる時は、学生証をカードポケットに読み込ませて、借りたい図書のバーコードを読み込ませる。その後、学生証を抜けば返却期限の書かれた紙が出力されるんだにゃ。

返す時は、同じように学生証をポケットに入れ、図書のバーコードを読み込ませる。学生証を抜いて、図書を返却ポストに入れる。これで終わりだにゃ。

でも、視聴覚資料や、製本雑誌などはこの装置では手続きができないからカウンターで手続きをとるんだにゃー。

### ※ 借りることができる冊数、期間

1人5冊までで、図書、製本雑誌は1週間。新着雑誌は1夜貸出できる。期限を守らないと、遅れた日数分だけ借りられなくなるから要注意だにゃ；・

さ、後は、あそこにいる図書館員Sさんに気づかれないように抜き足、差し足…

⑩ おーっと、カウンターには学生Fさんと図書館員Sさんが何やらパソコン見ながらうなずいてるにゃー。

どうやら医学図書館ホームページの利用についての話だにゃ。

そうそう、吾輩の聞き耳情報によれば、医学図書館ホームページから、電子ジャーナルやら、情報検索やら、複写申込やら、いろんなことができるそうだにゃ。

### ※電子ジャーナル

インターネットを經由して閲覧できる雑誌。医学系を中心に約3200タイトルの電子ジャーナルを閲覧できるんだにゃ。

### ※情報検索

読みたい論文がどの雑誌に掲載されているのかなどを調べるときにデータベースを利用するんだにゃ。

PubMed・医中誌Web・CINAHL・EBMR・UpToDate・JCR など

### ※複写申込

読みたい論文の掲載されている雑誌が医学図書館にないときもあきらめることはない。図書館は世界の図書館とつながっているんだにゃ。図書館に申し込めばその雑誌を持っている図書館に複写申込をしてもらえる。お金はかかるけどにゃ。例えば1枚35円+郵送料ってとこだにゃ。とにかく、まずはホームページから複写申込をするための手続きをカウンターで取るんだにゃ。





皆の衆，吾輩の医学図書館潜入レポートはいかがだったかにゃ？

医学図書館は見掛けは小さな建物だが，情報ネットワークでつながっているから，できることはこれ以外にもいろいろあるんだにゃ。まずはカウンターの図書館員に尋ねることだにゃ。それじゃ，皆の衆の充実した図書館ライフを祈って！ にゃ~~~~~ん！！

だけど，吾輩は，もう図書館には入らないにゃ。吾輩は調べものが大好きなんじゃが，どうしても図書館員Sさんが苦手でにゃあ。ありゃ怖いにゃあ。後は皆さんの突撃レポートを楽しみに待ってるにゃん。



手に入れた地図は  
次ページを見て。

こんな医学図書館で，私たちスタッフが皆さんの利用をお手伝いします。  
気軽に声をかけて下さい。待っています。



M.KIMURA



T.YASUNO



T.KUBO



H.TOCHIKAWA



M.SHIMIZU



M.YAMADA



C.SHIMIZU

